

二 戦場へ

昭和十一年七月六日、快晴の朝だった。

完全軍装をした南海第四守備隊第一大隊の本部要員及び第百六連隊から転属した歩兵一ヶ中隊と機関銃中隊約四百名は営庭に整列、出陣式が行われた。装備の触れ合う音、軍靴の音、ラッパの響き、入営以来常に聞いた音であるが、その朝は空気を切り裂くような気がした。

出陣式も終わり、第百六連隊連隊長以下が見送る中を南海第四守備隊は営門の方に向かって、出陣の第一歩を踏み出した。私は先導将校を命ぜられ、晴れがましくも部隊の先頭を馬に乗って営門を出たが、衛兵所の衛兵が総員起立してラッパの吹奏裏に「捧げ銃」の敬礼をし、私も抜刀して「投げ刀」の答礼を行った。

営門を出て国鉄加古川駅に着く迄、沿道住民の「万歳」の声に送られ、私は緊張のしっばなしだった。

加古川駅には軍用列車が到着していた。各車両には既に、他の連隊で編成された南海第四守備隊將兵を満載していた。我々四百名が手際よく乗り込むと列車は直ちに西へ向かって出発した。私が乗った車両は、連隊及び大隊の本部將校専用の車両であって、車両の後半分は白布を掛けたテーブルがある事務所風の車両だった。そしてそのテーブルに高級將校が集まり、広島駅に到着する迄、大きな図面を広げて会議を行っていた。我々下級士官には何処の戦場へ向かって出動しようとしているのか全く知らされてはいなかったが、図面の前の將校連は恐らく南海第四守備隊の任地や、其処に於ける任務・遂行要領等を話し合っていたのであろう。

広島駅で降りた部隊は幾つかに別れ、市内の旅館へ向かった。私の所属する第一大隊本部は、広島駅から宇品港へ通じる市電の走る大通りを約三十分程行進し、道路の東側にある大きな旅館

に入った。そして其処で日本の最後の夜を過ごした。

翌早朝、旅館を出て宇品港に着いた。広島市内に分散宿泊をしていた南海第四守備隊は続々と宇品港埠頭に集結し始めていた。宇品港は昔から軍隊が海外の戦場へ出立して行く、日本最大の軍港である。日清・日露の戦役に何十万の将兵が此の港から出て行き、激しい戦の後生き残った将兵がまた此の港に帰り着いたものである。そして今、太平洋戦争で、今迄の戦争で出て行った軍人の何倍もの数の軍人が宇品港から出発したし、これからも出発するであろう。そして歓呼の声に迎えられて再び此の港に下り立つ事の出来る将兵は如何程の数であろうか、また何時の日になることであろう。沖合には無数の軍艦が島々の影に見え隠れしている。どうやら我々は輸送船に乗るのでは無く軍艦に乗り込むらしい。いよいよランチに分乗する事になり、棧橋に整列した兵達に、各自軍装の点検が命じられた。その時一人の兵が青い顔をして、防毒面を旅館に置き忘れて来たことを届け出てきた。見ればぶるぶると震えている。防毒面は高度の軍事機密に属する兵器になっており、これを紛失すると大変な処罰を受けなければならない。既にランチが棧橋に近づいており、今から旅館に戻る余裕は無い。その兵の指揮官である福島軍曹も緊張して大隊長に処置の伺いを立てたが、野戦経歴を持つ大隊長は「防毒面の一つや二つ、慌てるな」と思いもせぬ返事が返ってきて驚くと同時にほっとしたものである。後日の事だが、やがて我々は防毒面どころではなく、南海第四守備隊の主要装備をも失うことになるのである。

多くのランチが将兵を満載して、埠頭と沖合に停泊中の艦船の間を何度も行き交った。重兵器類は予め別に運搬してあったらしく見当たらなかった。

我々第一大隊本部のランチが着いたのは巡洋艦（最上）の舷側であったが、軍艦に乗るのは初めてだったので、その威容に驚いた。まるで灰色に塗り込められた鉄の塊のようで、中央に橋塔があり、前甲板は主砲群、後甲板には飛行機がカタパルトの上に搭載されており、艦側は対空砲がずらりと並んでいる。これから何処へ行くのか知らないが、見知らぬ戦場の港に着くまで此の

巡洋艦（最上）に、命を預けることになるのであるが心強い限りである。

海軍将校から艦内の案内と艦内生活についての説明を受けたが、極めて機能的であって、よく整頓されているのには感心した。

昭和十八年七月九日、巡洋艦（最上）は宇品港を発進した。

やがて故国の山影も薄らいで来た頃、巡洋艦（最上）の艦上から周囲を見回すと何時の間にか多くの巨大な軍艦が集まり、一大艦隊を組んで南進している様子である。我々は今日日本帝国連合艦隊の主力艦隊の中にあることが判った。（最上）の前をとてつもなく大きな航空母艦（瑞鶴）が行くが、（最上）艦上から見ると、歩行者がビルディングを見上げているようである。他にも航空母艦・戦艦・巡洋艦・駆逐艦など多数の軍艦が見えられた。

（最上）の艦内ではガンルームと呼ばれる青年将校用の居室に海軍と同居したが、陸軍の我々にとつては高級サロンに入ったような豪華さである。食事にはビフテキ・伊勢海老——しかし慣れない艦上生活で運動不足と軽い船酔いの為、折角の豪華な料理もあまり食べることが出来ず惜しい事をしたものであった。

海軍の青年将校達とは直ぐに意気投合した。そして我々に衝撃的な情報を囁いてくれるようになった。彼等は無電で情報を収集しており、戦局の推移は詳細に知っていた。

常勝とばかり信じていた我々は、ミッドウエー海戦で大敗を喫して多くの軍艦を失った話等を聞いて始めは冗談かと思つたものである。青年将校は、ややいらだって「陸軍さんは本当に知らないのですか、海軍では各艦に日本海軍艦籍一覧表が備えつけられているが、それからどれだけの多くの軍艦名が抹消されていることか！ この巡洋艦（最上）だって初めからこんな姿ではなくミッドウエーで目茶苦茶に傷んだので今のようになカタパルトに改装したのですよ」

そういえば、軍艦絵はがきで巡洋艦（最上）の写真を見たことがあるが、確かにこんな姿では無かつたと、次第に不安な気持ちが増して来るのであった。

何でも隠さずに話してくれる青年将校達であったが、我々南海第四守備隊の任地は知らない様だった。とにかくこの大艦隊は連合艦隊司令部のあるトラック島に入港する予定で、そこから先は、数隻の軍艦が南海第四守備隊を任地に送り届けることになる筈だというのである。

艦隊は南支那海で猛烈な台風に遭ったがビクともしない。しかし暫くの間台湾のキールン港付近に退避したが、勿論上陸することもなく再び南方に向かった。

十八年七月十五日、艦隊はトラック島に入港した。

トラック島は南方作戦の根拠地であり、連合艦隊司令部の置かれている島である。湾内は軍艦で溢れており、島の飛行場では軍用機が間断無く発着していた。流石に軍の根拠地だけあって、頼もしい限りである。青年将校から聞かされた話も嘘のように感じられる。

ランチで湾内を一巡、案内を受けた後上陸した。トラック島は日本領土であるだけに、島には内地人も多く、日本の官庁学校等が立ち並び、言葉は全て日本語である。島で二泊、処々を見学した後、再び（最上）に帰艦した。

十八日、今度は巡洋艦（最上）の他、数隻の小規模の艦隊となり、更に南方へとトラック島を出帆した。

翌日の正午頃、突然、艦内に警報が鳴り響いた。将校・水兵達が慌ただしく部署に付いたが、直ぐに解除された。聞けば、流木を発見し、潜水艦ではないかと一応の警戒をしたのであった。

この頃南海第四守備隊本部から通達が届いた。既に危険海域に入っており、これからもどんな不測の事態が生じるかも知らないので、防諜上及び進退し易いように、所持品を出来るだけ少くするようにとの事である。不要品は海軍側で始末してくれるそうである。いよいよ戦場に近づいたという実感が胸が騒ぐおもいだった。

二十一日、漸くラバールが見えてきた。

噂に聞く美しい港である。街は見えないが、大王椰子の並木が続き、外人の住居だった瀟洒な

家も建ち並んでいるらしい。港を囲むように突き出ている岬に絵のような円錐形の山が見える。花吹山と呼ばれている旧火山で、かつて火口の中に敵スパイが潜んでいて、ラバールに出入する日本艦船の動向を逐一無電で送っていたことがあったそうである。

我々は此処に上陸出来るのかと思ったが、淡い期待は無残に破られた。これから更に前線に行く為に、大隊本部は出来るだけ速かに駆逐艦に乗り換えるよう命令が出た。

南海第四守備隊が分乗して来た他の各艦の将兵達は次々と駆逐艦に移乗、既に出港しており、「最上」からの移乗が一番最後であった。最近ラバール上空も敵機が出没し始めており、港内に兵員を満載した艦船が長時間停泊することは危険になってきていた。

ラバールはソロモン及びニューギニア戦場の後方基地であり、此処に陸軍は今村大將を司令官とする第八方面軍司令部が設置されており、海軍も第八艦隊司令部が進出して来ていた。従ってかなりの軍艦・航空機や夥しい軍需物資を保有する陸海軍の強力な南方拠点である。そして前線の基地であると共に、内地・トラック島との間の制空権・制海権の確保に努め、輸送航路の安全を図って来たが、十八年に入ってから米軍の中・南太平洋地域に対する攻勢が急となり日本内地を離れると、安全な所は既に無かった。

特に、ラバール港を一步出ると艦船の航行は極めて危険との事である。敵はラバール港を出てソロモン及びニューギニアの処々方々の戦場に送られる兵員や物資を喉元ラバール近くで効率的に捕捉撃滅しようとしているらしい。

我々も迅速に乗継ぐ必要があった。「最上」から離艦するに当たって、十三日間親切な待遇を受け親密な間柄となった海軍士官達に礼を述べたが、お互いに明日とも知れぬ命をかけて働いているだけに、別れに際して我々を見つめる青年将校達の澄んだ眼には無言の励ましと同情の色があった。

「最上」から駆逐艦に乗り移り、薄暮の頃合に出港した。

ラパールからソロモンに行くには、先ずラパールのあるニューブリテン島と対岸のニューアイランド島との間にあるセントジョージ海峡を突き切りつてソロモン海に出、ブーゲンビル島の西北端に一先ず辿り着き、そこから再び頃合を見計らつて出航、ブーゲンビル島の北岸に沿つて進むのである。

一番危険な場所はセントジョージ海峡からソロモン海に出る付近である。従つてラパールから次の中継基地までは速力の早い駆逐艦でしか行かれないのである。我々の乗った駆逐艦も全速力で航行した。最初私は甲板に出ていたが風と波飛沫が物凄く、立っているのも容易ではない。

やがて海軍の乗員から艦内に入るよう注意された。艦内に入るには、マンホールの蓋のようなハッチを開け潜り入らなければならないので極め不安で、しかも駆逐艦の艦内は非常に狭いので益々心細い気持ちに襲われてくるのであった。果せるかな、ソロモン海に出た頃、艦内に警報が響き渡った。到頭来たかと覚悟せざるをえなかった。艦はS字型に蛇行を始め左右に大きく揺れ緊張した海軍将兵が機敏に走り回っている。敵機が照明弾をおとして艦を追尾し始めたらしい。

やがて爆弾攻撃を受けるものと覚悟していたら、どどーんと、艦の方から先に対空砲の射撃を始めた。駆逐艦の対空砲撃は艦内から発射するので艦内は轟音に包まれ、益々恐怖心が募つて来るが何の手出しも出来ぬ状態で、只海軍将兵の動きを見守っているだけであつた。幸い敵機は偵察機だつたらしく、対空砲撃を避けて遠のいて行った。艦は再び漆黒のソロモン海を全速力でブーゲンビル島西北端に向かつて航行を続けた。

ブーゲンビル島の西北端タリナは、その対岸の小島ブカ島と共に小規模ながら要塞を形造つてラパールと前線間の兵員・物資の輸送中継基地となつていた。

夜明け前タリナに着いた我々は駆逐艦から上陸し、海岸から少し入ったジャングル内で小休止して夜明けを待った。やがて夜の帳が開き、我々が見たのは日本とは異質の風景だった。底抜けに青く深い南国の天空、珊瑚礁の砕けた真白い砂浜と、その先に広がるエメラルド色のラグーン

(礁湖)、海岸は果てしなく椰子樹が続き、いづれもたわわに実を付けている。絵のような風景に暫し見入っていた時、二三十人の異様な人間がジャングルの中から現れて海岸の方へと歩いて行く。背が高く、肌は黒いが、顔立ちは彫り深く土民とも思えない。聞けばタリナの飛行場整備の使役に使われている印度人捕虜で、これから海岸で彼等独特の朝食の準備を始めるらしい。

此処タリナは、ソロモン群島各地の戦場へ行く為にラバールを出た部隊が一旦この地に寄って一二日待機する場所になっているので、ジャングル内の至る所に椰子の葉で葺いた粗末な空小屋があり、我々もそれらに分宿することになった。一二日の待機ではあるが、久し振りに土の上での生活を始めた我々は皆一様に「これから先どんな苦しい状況が待ち受けていようとも我々陸軍にとって海は苦手」と話し合ったものである。

折りも折り、衝撃的な情報が入った。

南海第四守備隊の一部を乗せて、我々より数時間前タリナを出て行った特務艦が敵機の攻撃を受けて撃沈されたと言う。それには第一大隊の歩兵中隊も乗っていたと言う。

ブーゲンビル島の北岸に沿って航行し、間もなくブインへ到着する直前に、敵機の攻撃を受けたらしい。特務艦は民間船を改造した船で、装備は貧弱であり且つ速力も遅いので、逃れようが無かったのである。沈没特務艦には兵員の他、野砲、戦車等、部隊の主要兵器弾薬類も満載していたが、多数の兵員と主要装備類は戦場に着く前にソロモンの海に葬られてしまったのである。後日になってから聞いたのであるが、目的地ブインに近くなり船内の広間に将校が集合し上陸後の種々打ち合わせを行っていた時に敵機の来襲があり、爆弾の一つが甲板を貫通して、会議中の広間で爆発したので将校の戦死者が多かったそうである。勿論輸送船が撃沈されるのを目撃したわけではないし、僅かに、九死に一生を得た橋本と言う歩兵中隊の中尉から断片的な話を後日になって聞いただけなので、その状況は詳しくは判らないが、恐らく悲惨な状況であったろう。

太平洋戦争中、撃沈された艦船の数は計り知れない。

この戦争に於いて膨大な数の日本軍人が戦死したが、彼等は必ずしも敵弾に倒れたのではなく戦場に着くまでに船が攻撃され、猛火に包まれ船に閉じ込められたまま、恨みをのんで海の藻屑と消え果てた者も多い。

我々南海第四守備隊より数ヶ月後に、我々と同様ソロモン急援の爲中国戦線からラバールへ向かう途中で撃沈された輸送船に乗っていた姫路師団の兵の手記がある。

以下はその体験記である。

自分は野砲連隊・歩兵連隊合わせて千三百九十七人と共に粟田丸と言う輸送船に乗船しました他の連隊将兵は日枝丸・清澄丸・護国丸等に分乗し、これら四隻の輸送船を取り囲む様に巡洋艦二隻と駆逐艦二隻が護衛して出航しました。この堂々たる船団に、いささかも不安を感じずる事は無く、勇躍、新戦場へ向かったのです。

中国大陆の上海に近い呉淞（ウースン）港を出て、台湾に近いと思われる東支那海のと真ん中だった。十八年十月二十二日午前三時、ドカーンと強烈な衝撃音がして一万トンの粟田丸が物凄く揺れた。

「潜水艦の魚雷だ！ 次の魚雷が来るから早く甲板に上がれ、急げ！」

真暗な中でガラガラと物が頭上に落ちてくる。救命具どころではない、ひしめきあって昇降口に殺到するところへグワーン、グワーンと続けさまの魚雷命中。目も眩む火の海、船は木の葉のように揺れてまともに立ち上がれない。船倉から昇降口へかけて巨大な火柱がすぎましい爆風と共に吹き上がっている。悲鳴の中をやっと甲板に這いだした者も火だるまであり、手や足をもぎ取られた者も多い。そこへ大波が襲いかかり、大きく傾いた船から将兵がぼろぼろと振り落とされる。

更に数発の魚雷を食らい、やがて大音響と共に船は真二つに破裂して海中に姿を没し、巨大な

水柱が立つた。

海中に投げ出された僅かな者も、さらに渦に巻き込まれ、運のある者は材木等にくらいついて浮上し意識を取り戻した。しかし十月の大海原に浮遊する兵達は、その寒さに耐えるために軍歌を合唱していたが力尽きて次々と波間に姿を消して行く。

東の空が明るくなってから友軍水上機に発見され、海に放り出されてから七時間たってやっと駆逐艦（舞風）に救助された。希有の幸運に恵まれた者は一三九七人の中で九十人であった。

しかし、その救出された九十人もその後更に血みどろの戦場で生死の間をさまよい、果たして何名が生きて故国の土を踏み得たであろうか。

更に手記は続く。

一夜明けた船団はホッと一息ついたが、航行位置を発見された船団は極めて危険だ。ラバールに着くまで再々敵機の銃爆撃を受け、日枝丸・清澄丸が沈没こそしかつたが大きな損傷を受けてなお数百人の犠牲者をだしたのである。

やっとの思いでラバール港の五号栈橋に上陸したが、既にラバールは十字星の下、椰子並木の、美しい基地ではなかった。

上陸したその日から警報・対空砲火・爆弾の炸裂音の渦の中にほうりこまれた。

自分は上陸後伝令となって爆撃下のラバールを走っていた。五十メートル程頭上に爆弾が落下して来る音で危ないと直感、道路脇の排水路に身を投げた。形容の仕様がなないあの物凄い轟音、土煙がうすれ、前を窺うと、前方二メートル程の所に首の無い兵隊が転がっていた。風圧と地鳴りが続く。ドラム罐が膨れて次々と爆発し猛烈な火炎が吹き上がる。

我々の行く先に待っているのは死より他は無いという事を思い知らされた。

海の悲劇は随所に起こっていたが、我が南海第四守備隊の戦友達も惨劇に遭ったのである。

宇品港を出て長途、この蒙昧の地ソロモン迄来て、戦場にも到着すること無く船と共に沈んだのは悲惨なことであり、残った我々も目の前が暗くなる様な衝撃を味わった。又、いづれ我々も同じ航路を通って行くのであるが、行手に待ち構えている危険を考えると脅えざるを得なかった。その頃になると我々の任務・行先もはっきりとして来ていたが、ソロモン増援に決まる迄には種々事情があったらしい。後日判った事であるが、南海第四守備隊は十八年六月の大本営命令に依って、ギルバート諸島防衛の為に編成され、七月九日宇品港出発、七月十五日トラック島到着十九日にトラック島を出港したのであるが、このトラック島滞在中に大本営より命令変更がありギルバート諸島防衛から風雲急を告げるソロモン増援の任務に変わったのである。

因みに、南海守備隊は第一部隊から第四部隊迄編成され、ギルバート諸島・マーシャル群島・南鳥島・ウェーク島など中部及び南部太平洋の海軍が占領している島々の防衛任務が与えられてそれぞれ四月から七月の間に宇品港から出発して行ったのであるが、四守備隊共いづれの部隊も目的地に着く迄に敵の潜水艦或いは飛行機の攻撃を受け、甚大な被害をだしている。第二守備隊は宇品港出港の翌日、部隊の乗った八海丸が潜水艦攻撃を受け、部隊の過半数が海没戦死したし第一守備隊の場合は最も酷く輸送船バンコック丸がギルバート諸島へ向かう途中雷撃で轟沈し、部隊長以下八百名の殆ど戦死、ギルバート諸島防衛は果たせなかった。南海第四守備隊の行先が当初ギルバート諸島であつたのは、その第一守備隊の後釜であつたのかも知れない。

なお、そのギルバート諸島は、間もなく戦史にも最も悲惨な全員玉砕を遂げている。九月初旬から断続的に米機動部隊の来襲があつたが、十一月二十一日マキン・タラワ島に二百余の艦船で来攻し、艦砲援護射撃を受けつつ海兵隊を含む十一万の大軍が数百隻の水陸両用舟艇で上陸して来た。海浜を血で染めて死闘が繰り返され、米軍も夥しい戦傷者をだしたが、マキンは二十四日タラワは二十五日玉砕し果てたのである。

我が南海第四守備隊の輸送船もまた敵の攻撃を免れることは出来なかった。

そんな事情もあって、一番後尾だった我々大隊本部のタリナ出発は延期となり、暫くタリナで待機することになった。

ところが、そんな時、待機中のタリナで大隊本部でも厄介な出来事があった。

或る日、タリナの海上沖合が急に真っ暗になったと見る間に、巨大な龍巻が生じ、それが急速にタリナに近づいて来た。我々は急いで防空壕に難をさけたが、地上は暴風で荒れ狂っている様で、耳を聳する轟音に包まれていた。やがて龍巻も去り、壕を出て驚いた。ニッパ椰子の小屋が無残に壊滅しているばかりでなく、強靱な椰子の木さえ根から引き抜かれてあちらこちらに倒れており、その暴力に驚かされた。

そのうち、大隊本部事務室の残骸の片づけをしていた下士官が、暗号の乱数表が龍巻のために飛散して行方が判らなくなっているのに気付いて真っ青になった。暗号書は軍の最大の秘密書類である。それから数日間は全員で暗号書探しに明け暮れ、ようやくジャングルの大木に引掛っているのを見付けて胸を撫で下ろしたものである。

待機すること約半月、八月六日タリナを出発した。

今度は軍艦ではなく貧弱な特務艦であって、兵員・装備をむりやりに積み込んだがエンジン音ばかりが喧しく、速力は全然出ない。先発した戦友達が爆撃を受けたブーゲンビル島北岸沿いの航路を、のろのろと、ブーゲンビル島西端のブイン目指して進んで行った。

マングロープが海上まで迫っていて、その所々に僅かな白浜が見える。ブーゲンビル島の長大な海岸は果てし無く続く。

船足の遅い特務艦は、それでも船体を激しく振動させながら、一秒でも早くブインに辿り着こうとしており、船も又危険を察知した生き物のようである。

ブイン周辺には一日に何回か敵機が現れるが、見つければ撃沈されるのは確実であり、只発見されないように祈る以外に手の打ちようが無かった。

丸一昼夜、危険な航行の後に無事到着出来たのは全く僥倖だった。敵機を避けるためにブインへは日没後に到着する予定だったので、ブイン近くのエレベントの砂浜に上陸した時は既に夜になっていた。月明かりもなく、真っ暗であり、海岸にせまるジャングルが黒々と空を覆っているようで、不気味な印象をうけた。

我々が上陸する為に大発が船と海岸の間を行き来したが、それ以外に多くの大発が海岸を発着しており、何か非常に緊張した雰囲気があったように思えた。

ふと、我々が上陸した地点から五十メートル程離れた、慌ただしく大発が発着している場所を見ると、砂浜に七八十人程の人間が大発から降ろされて横たわっている。動く気配も無いところを見ると、戦死者か重傷者らしい。そして大発が着く度に増えてゆく。聞けばソロモンの島々に米軍が侵攻し、激戦の末撤退を開始したが、昼間は危険なので夜間駆逐艦と大発で輸送することになり、まず重傷者から始めたらしい。

何度か大発が往復して、やっと我々の部隊が上陸をし終わるや否や、整列・点呼もする事無く直ちに各人がそれぞれ、敵機の銃爆撃に備えて一人用の壕を掘るように命令が出た。

私は将校であるけれども、戦争全般の推移や、このソロモンの戦況について、今まで何ら聞かされない。ただ海軍士官の話などと思わしくない状況に立ち至っている事は察知していたが、上陸の第一夜から、戦傷者の悲惨な撤退状況を目撃し、状況のただならぬ有様を知って、暗然としたものである。

当時の戦況は概略以下のような状況だったのである。

昭和十六年十二月開戦劈頭、真珠湾を奇襲して大戦果を挙げたが、翌十七年六月ミッドウェイ海戦では、連合艦隊虎の子の攻撃型航空母艦六隻のうち四隻と、その搭載機四百機を失うと言う大惨敗を喫し、南太平洋での制空権、制海権にひびが入ってしまった。それに比し、米国は奇襲による損害からの修復と、優勢な工業力による軍備増強によって十七年秋には反攻体制が整い、

先ずソロモンの奪還に乗り出した。ソロモンの最東端近くのガダルカナル島は飛行場適地が有る戦略上の要地であり、米軍はこれからの進攻基地にする為に、どれだけの犠牲を払らっても奪取する可く猛攻をかけてきた。日本側としてもその防衛が今後の戦況を左右し、今次大戦の勝敗の帰趨に関わる問題として次々と増援部隊を送り込み、戦闘毎に全滅するという激烈・悲惨な戦が数か月間繰り返されたが、既に海上輸送力は米側に制せられて弾薬・食料の補充も出来なくなり数万の将兵が只死を待つのみという状況となった。そして遂に十八年一月から残存兵の撤退収容を図ったが、敵の目から逃れながら夜間に駆逐艦や小艇しか利用出来ず撤退作戰もまた地獄図を描きだったのであった。

米軍はガダルカナル島を手に入れるや否や、瞬く間に飛行場を整備しソロモン全域攻略の基地造成を完了し、息つく間まなくレンドバ・ムンダ・ペララベラなどへ進攻の気配をしめし始めたのである。米軍は明らかに、日本軍の最前線拠点ソロモン群島を制圧して基地を更に前進せしめ次はラバール、そしてトラック島、フィリッピン、台湾、沖縄、と次々基地を進めながらやがて日本本土を攻撃する戦略である。

これに対し日本軍はガダルカナル島は奪われたものの、最前線ソロモンで敵の攻勢開始の初期に要撃することの重要性から全軍の艦隊・航空戦力を挙げて反攻することになった。十八年二月ガダルカナル島撤退以後、その年の暮れ迄はソロモン群島の海域・上空で日夜、海戦と空中戦が続き、海上に殷々たる砲声が止むことがなかった。そしてその反撃の督励のためラバールを飛び立った連合艦隊司令長官、山本五十六大将の搭乗機は、四月十八日、その行動を暗号解読により察知した米軍機二十四機に待ち伏せされてブイン上空で迎撃撃墜されたが暗い予感のする出来事であった。

その頃の空中戦では、航空機（零戦）の優れた機能と搭乗員の優秀さにより常に日本機が優勢であり、米機十に対して日本機二が対応すると評価されていた。しかしながら、日本の工業力が

貧弱なために消耗の回復が進まないで次第に劣勢となつて行かざるをえなかった。又海戦では前半、日本海軍の艦砲射撃能力が米海軍よりも優れており、大きな戦果を挙げ得たが、後に米艦に高性能の電探器が装備されるに至つて不利な状況になつたといわれている。

ソロモン初期の戦闘はそれ以降の戦闘と違つて、結局は敗退したものの日米が物量をぶつつけ合つた激闘であつた。そしてその激闘の末、六月にはレンドバ島、七月にはムンダから日本軍は敗退した。またしてもガダルカナル島から撤退した時と同じような地獄図が繰り広げられたのであつた。

以上が当時迄の戦況であるが、そうした夜々砲声がソロモン海に轟きわたり、激しい戦闘の末、攻略された島々から死傷者が小艇で後送され、ブーゲンビル島の海岸に並べられている、その死臭、ただよう砂浜に我々は上陸したのであつた。もともとギルバート諸島防衛の為に編成、出発した南海第四守備隊であつたが、大本营命令を変更までして急遽駆けつけた戦場であるだけに、情勢は急迫してゐた。

上陸の翌々日の八月九日、南海第四守備隊の連隊本部等主力はブインに残り、第一大隊だけがショートランド島に向かつた。

このブインの対岸にあるショートランド島は、小島ながら大型の艦船が停泊出来る泊地を持つ、戦路上重要な島であり、十七年三月、日本軍がソロモンに進出した時最初に占領し、以来海軍がこの地域の基地としてゐる。従つて敵の方でも着目しており、やがて進攻が予想されている島である。そして其処が我々南海第四守備隊第一大隊が防衛任務を果たすべき最終到着地であつた。

何隻かの大発に分乗し、何回かに分けてブインを出発した。

ブインからショートランド島への間は昼夜を問わず最も危険な海域であり、とにかく一刻も早く辿り着く事が必要だつた。が、やはり犠牲がでた。分乗した或る一隻、第一中隊将兵が乗つた大発がブインとショートランド島のほぼ中間付近で敵機に発見されて機銃掃射を受け、中隊長以

下多数の死傷者を出したが、その時二人の同僚見習士官も重傷を負った。一人は頭蓋骨を損傷し、脳が直接見える有様で野戦病院に収容された事までは知っているが、その後どうなったかは判らない。健康な者でも生還が困難な戦場であっただけに、恐らくは死没したのではなからうか。もう一人の見習士官は脚に重傷を負ったが、跛になつて終戦後無事帰還しており、終戦後大阪で偶然出会った。義足の脚は痛々しかったが、元気に頑張っているのを見て嬉しかった。